

背景

- GIGAスクール構想の推進やPISA等の国際学力調査のCBT※による実施の流れなどを踏まえ、全国学力・学習状況調査のCBT化について、「全国的な学力調査のCBT化検討WG」において、専門的・技術的観点から検討を行い、令和3年7月に「最終まとめ」。
- 1人1台端末を活用したCBT化により、現在の紙形式による実施では困難な、自治体・学校現場等への迅速なフィードバック、より精緻で多様なデータの収集、調査実施における改善・効率化が可能となる。 ※ CBT (Computer Based Testing) : コンピュータ使用型調査



[令和3年度全国学力・学習状況調査 児童生徒質問紙調査における端末を活用したオンラインによる実施の様子 代表撮影]

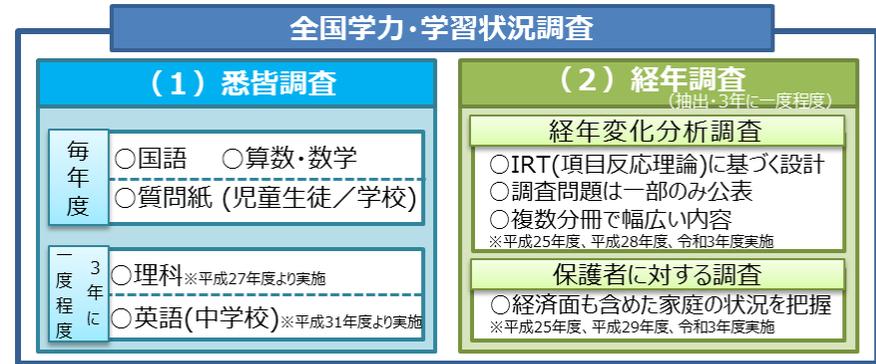
方向性と工程 (CBT化検討WG「最終まとめ」より)

- ①令和3年度以降、試行・検証により課題の抽出とその解決を繰り返し、段階的に内容等を拡充させながらCBT化の実現に着実につなげる。
- ②国が実施すべき主要な調査の「2本柱」である悉皆調査と経年調査※1を、各調査の目的に即して、最適な方法を設計し、それぞれCBT化。

<工程に関する考え方>

- ③令和6年度から順次CBTを導入

- ・経年調査は、次回予定の令和6年度から導入。 ※2
 - ・児童生徒質問紙調査は、令和6年度を目途にオンラインによる回答方式を全面導入。
 - ・悉皆調査の教科調査は、令和7年度以降できるだけ速やかに中学校から先行導入し、それ以降、できるだけ速やかに小学校に導入。 ※2
- ※1 経年変化分析調査及び保護者に対する調査 ※2 紙形式を経過的に併用



① CBT試行・検証事業の実施

実施方法やネットワーク環境、システム機能、学校支援方策、児童生徒の端末操作等について、MEXCBTを活用し、段階的な試行・検証を実施。

<令和3年度>

小中学校100校程度(約1万人の児童生徒)を対象に学校単位で実施。

<問題画面イメージ例>



<令和4年度>

令和3年度の試行・検証の結果を踏まえつつ、自治体単位で実施予定。

② 詳細な調査設計等の検討

それぞれの調査の目的に即して、専門的・技術的観点から詳細な調査設計を検討(令和3年7月設置)。

○悉皆調査プロジェクトチーム

- ・問題設計及び結果分析等の在り方
- ・試行検証の評価及び課題の改善に向けた検討
- ・合理的配慮の在り方 等

○経年調査プロジェクトチーム

- ・次回調査の実施に向けた課題の整理
- ・保護者調査のオンライン化に関する検討
- ・国際学力調査の動向を踏まえた更に効率的な測定手法の検討 等



③ 質問紙調査のオンライン化

悉皆調査の児童生徒質問紙調査について、一部の学校で、端末を活用したオンラインによる回答方式で実施。オンライン実施と紙実施の違いなどについて把握・検証しつつ、段階的に規模を拡充。

<令和3年度>

一部の国立大学附属学校(108校・約1万人)において、試行的に実施。

<令和4年度>

20万人程度の児童生徒を対象に、一定期間内で分散して実施予定。

※学校質問紙調査は平成28年度よりオンラインによる回答方式を導入済み

問題開発等

国立教育政策研究所において、CBTの導入に向けた問題開発等を実施するとともに、CBTの特性を活かした測定の在り方や先進的技術の活用に係るフイージビリティ等について研究開発を実施。